

事柄は、すべてコンピュータ上で実現できる」という考え方です。当時は四面楚歌のような状況でしたが、今は多くの方が賛同してくれるのではないのでしょうか。

脇道にそれてしまいましたが（私にとっては難解な）明細書を見たり、その意義の話を聞いたりするうちに、「ああこれも計算世界観の一つだな」と感じたのです。発明を、人々が理解し、共有し、さらに発展させるためには文書化が必要です。コンピュータ上ならばプログラム（＝計算の指示書）として表しますが、発明の場合には明細書として表されるのだなあ、と解釈したのです。

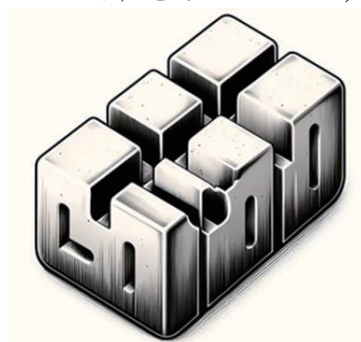
再び協道にそれます。コンピュータの世界、その中でもプログラミング教育では、いま生成 AI の話が大きな話題になっています。まあ、生成 AI が話題になっているのはどこでもかもしれませんが。様々な負の側面が言われる中、「理工系の大学らしく、まずは使ってみようじゃないか！」という学長の掛け声のもと、東工大では昨年の夏、「ChatGPT を使い倒せ！」というコンテストを実施しました。学生同士でチームを組み、8 月末に ChatGPT の基本を学んだ後、9 月一杯をかけてアプリ制作を行い、そのユニークさや完成度を競うコンテストです。ChatGPT4 の使用料金支援や豪華賞品などもあって、アナウンス期間が 1 か月と短かったのですが、約 20 組の応募があり、どのチームも素晴らしいアプリを制作してくれました。そこで気付かされたことも多かったのですが、最も印象的だったのは、プログラミングへの敷居が下がった、という実感でした。その良い例が最優秀賞を獲得したチームです。このチームはリーダーの「高齢者のケア者をケアする仕組みが必要」という課題意識のもと、ケア者の口頭での報告をスマホで聞き取り、それを文書化するとともに、ケア者の精神状況を分析し、問題を早期に見つけるスマホアプリを開発したのです。音声認識や文書解析などに関する高度なプログラムを使っています。驚かされたのは、リーダーには、そうした高度なプログラミングの知識がほとんど無かったという点です。それこそ ChatGPT に相談し、かなりのところを作ってもらったとか。もちろん、プログラムのチェックや細部の補填や調整には、チームの情報系のメンバーの頑張りも必須でした。でも、そこまでできるのだ！という驚きをもらいました。プログラミングの、そしてソフトウェア作りの敷居が大きく下がったことを実感させられました。

こうなると従来のソフトウェア作り，特にプログラミングの教育も変えねばなりません。その後，情報系の教員たちとも話したのですが，従来のプログラミング教育については，引き続き同程度の教育は必要と考えているそうです。生成 AI は，プロトタイプとしてのラフなプログラムの提案や，逆にごく些細な文法ミスの修正には威力を発揮しますが，プログラム細部の設計，そして最も大切な正しさの検証には，プログラミングの理解が不可欠だからです。けれども一方で，生成 AI を，それこそ使い倒してみても，その上で何ができるかを学生たちで検討してもらう，という野心的な授業も計画しているそうです。

さて、翻って、知財の場面でも同様の使い方ができるのでは？と思いました。知財の敷居を下げるのに活用できるのではないかと考えたのです。まずは、二つの活用法が思いつきます。一つ目は、発明のアイデアに対して関連する特許を探し出す道具としてです。研究文献検索の世界では、そうした検索システム・検索サービスは生成 AI の登場により飛躍的に進化していますが、知財の世界でも同様だと思います。さらに、生成 AI は、そのようにして見つけた特許の明細書を理解する道具にも使えそうです。それが二つ目の活用法です。この巻頭言を書くにあたり、この二つ目の可能性を、INPIT や東工大

実験では、OpenAI 社の ChatGPT 4o（以下では、ChatGPT。）を使いました。著名な半導体、ゲームソフト、文具、いくつかの装置に関する特許の明細書を ChatGPT と会話をしながら読んでみました。その結果、たとえば、以下のような点に気がきました。

- 文章を読み解く能力は確かに優れていて、素人にもわかりやすい文にしてくれる。
- × 専門家の目から見ると、説明が甘い、要点をはずしていることも少なくない。
- 検索能力もなかなかすぐれている。指示をすれば関連する技術論文も示唆してくれる。
- × もっともらしい技術論文を提出するが、その論文が最適な文献かという点疑問な場合が多い。
- △ 文章からイメージ図を作成する能力はまだまだ？



その他にも、複数の例で文章だけからイメージ図を作らせてみましたが、芳しい成果は得られませんでした。これを現時点での限界と思うの

以上、ごく少数の実験例からですが、ChatGPT は少々物足りないけれども、親切な解説者という感触を得ました。いつでも気軽に聞けて、労力も惜しまずに答えてくれる人です。もっとも、これは何も明細書の解説に限らず、様々な応用場面でも言われていることです。

現状は、そんな AI 先生であることを確認した上で、それでも知財の敷居を下げ、知財を広めるため

にも使える、と考えました。発明そのものを知ること重要ですが、文書化されたものから発明の意義を理解することも重要だと思うからです。例えば、高校などでの知財教育の中で、おもしろそうな特許を探索するだけでなく、グループで AI 先生と対話しながら探索した特許の明細書を読み解き、その発明の意義の理解を深める、といった取り組みもよいでしょう。もちろん、AI 先生が要点をはずしている場合もあるので、他の視点で見ることの重要性も学びながらです。これは AI の使い方の学習という観点でも意義があると思います。他にもいろいろな使い道があるはずです。そのノウハウを得るためにも、知財を広める活動の中で、**生成 AI を使い倒してみましよう！**というのが私からの提案です。

冒頭にも述べましたが、INPIT も 20 周年を迎え、社会により役立つことを目指し、この度、ミッション・ビジョン・バリュー (MVV) も制定しました (<https://www.inpit.go.jp/about/profile/index.html>)。そこでも掲げているように、知財の重要性や価値を社会に広める活動を、多くの関係者の方々と進めていきたいと考えております。その中で生成 AI の活用など、新たな試みにも挑戦していく所存です。今後の INPIT の活動にご期待ください。